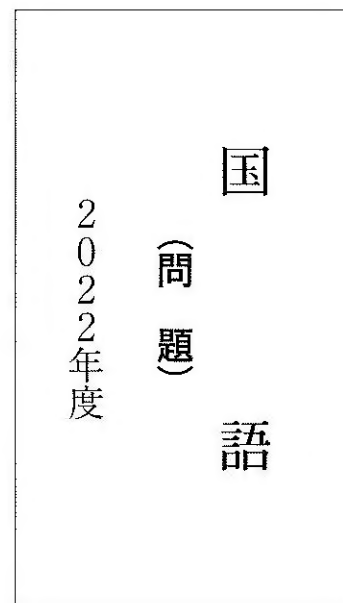




〈R04160062〉

注 意 事 項

1. 問題冊子および解答用紙は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
 2. 問題は2～10ページに記載されている。問題冊子や解答用紙の印刷が不鮮明であったり、ページが抜けていたり、汚れていたりしている場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
 3. 解答はすべて解答用紙の所定欄にHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
 4. 受験番号および氏名は、試験が始まってから、解答用紙の所定欄（2か所）に正確に正しいに記入すること。
- 読みづらい数字は採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

5. 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
6. 試験終了の指示がでたら、ただちに筆記具を置くこと。終了の指示に従わない場合は、答案のすべてを無効とするので注意すること。
7. いかなる場合でも、解答用紙は提出すること。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

歴史は、フドウの現実などというものが存在しないことを教えている。① 目前の事物にとらわれずに、これを大きな視界の中に入れて見直すと——それが I に見るということであるが——現実とは、現在どんなに動かしがたく見えようとも、やがては変るべきもの、変らずにはいないものとして存在しているのである。してみれば、一人の青年が現実におつかって、その強い抵抗を経験し、理想を求めることなどは夢のようなものだ、と考えるのは、個人の力の限界を知ったという意味では正しいけれど、現実に対して理想は全然無力であり、現実とは動かしがたいものだと思える点ではまちがっている。理想と現実との関係は、もう一歩つっこんで考えてみなければならない。

もともと社会は、個人が集って相談して作ったものではない。人間は社会的存在だといわれるように、② 原始のころから集団として生活し、集団として成長して来た。個人とは社会であつての個人であつて、本来、社会の中に生まれ、社会の中に育ち、社会の中で個人となつてゐるのである。同様に、社会の制度やしきたりというものも、何もないところに誰かがコウアンして生み出したものではなく、それぞれ、その時代の社会の必要に促され、また、その社会の構造から歴史的に規定されてできあがつてゐるのである。

A、この社会的現実が、個人の思いつきや、個人的希望や、個人の注文などでは動かされず、③ レイコクにそれをはねつけるとしても、それはあたりまえと考えなければならぬであらう。その限り、個人が社会に対してつくづく無力だと自ら感じるのも、これもまた当然のことである。B、そのことは、そのまま理想というものの無力を証明してゐるのだろうか。そういう切れるだろうか。

そこで私たちは、理想と空想とのちがいを、はっきりさせる必要がある。——昔から、現実の国家や社会生活の欠陥に気がついて、その欠陥をとりのぞいた理想の国や、理想の社会生活を構想した思想家は、たくさんいる。代表的なのはトマス・モアで、彼の描いた理想的な国がユートピアと呼ばれたので、一般に、こういう理想国や理想的社会をユートピアと呼んでいる。これは、たしかに空想の産物である。多くの場合、それは、どうしてそのような理想的な社会に到達できるのか、また、どうして現在の欠陥に満ちた社会をそのように改造できるのか、という現実の問題には答えていないし、いまの社会や国家がいまのようなものとならざるを得なかった事情——その歴史的条件というもの——も十分に考慮されていないのである。それで、今日ではユートピアといえば、ふつうは夢の国という意味に解されているのである。しかしユートピアは、このように、たしかに空想によつて描き出されてゐるとはいえ、けつして単なる空想だけに終つてはいないのである。その空想の底に、強烈な現実の意味がある。そして、この現実的な意味によつて、空想と区別された理想というものが、はっきりと取り出されるのである。

C、ユートピアを書いたトマス・モアのことや、オーウェンとかフーリエなどという有名なユートピア思想家のことをお話しできないのは残念だが、これらの典型的なユートピストたちは、いずれも、彼ら自身の生きていた時代の政治や社会に対して、ひとなみ以上の強い関心をもつてゐた。当時の社会の大きな欠陥をはっきりと認めて、その欠陥のために苦しんでいる人々の運

命について、深く心を痛めていた。そして、その問題の解決に役立とうとして、彼らは、そのような欠陥の取りのぞかれた社会をいきいきと心に描き、そうなればどれほど人々がしあわせな人間らしい生活を送ることができるかを、世の中に訴えたのであった。だから、それは単なる夢物語ではなく、現実に対する痛烈な批判や、深刻な諷刺^{ふうし}を含んでいたのである。彼らが、理想的な国や政治や社会制度を構想力によって描き出したのは、**Ⅱ** けつしてな空想としてではなかった。眼の前に見ている多くの不正、大衆の悲惨、眼にあまる不平等を、捨てておけない問題と考えたからこそ、彼らは理想的な社会生活に思いを馳^はせたのである。彼らが、空想的にしか、この理想を描くことができなかったのは、当時まだ社会に関する科学が発達していなかったためだといわれる。

このことは、私たちに何を教えるであろうか。——理想とは、現実の社会の外から^{あまた}天降りに出て来る空想ではない、ということである。自分の周囲に現実に存在しているさまざまな不合理や、不正や、悲惨に出あうとき、私たちの心の中には、それに対して「否」と叫ぶものがある。私たちの心は、痛みを感じながら、この現実をそのまま受け入れることを拒否する。そして、こういう経験を通じて私たちは、自分が人間として何を求めているか、何を求めずにはいられないかを知ってくるのである。それは、やがて、人間の関係がどのようなものでなければならぬか、を私たちに教えてくれるであろう。人間がたがいに分ちがたい関係をもつて一体となって生活している社会生活についても、それが人間の人間らしいつながりであるためには、どういう社会でなければならぬか、どういう制度をもたねばならないか、どういう不合理を除去しなければならぬか、——私たちはそれを考えざるをえなくなるであろう。私たちが理想と呼ぶものは、このようにして、私たちの心にめざめてくるのである。

してみれば、理想とは——生きた理想とは——、現実と無縁なものであるどころか、むしろ、現実の中から、現実との関係で生まれてくるものなのだ、といえるであろう。それは、現実に社会の中にいる現実の人間の胸に、人間の**Ⅲ** な要求の表現となつて、自分をあらわすのである。また、だからこそ私たちは、現実によって理想がはばまれることを、苦痛として感じるのである。それは、人間の最も本質的な要求の否定であり、人間の人間であることの否定にひとしいからである。理想は、けつして現実からかけはなれた根なし草ではない。

現実に対して理想が無力であるとか、ないとか、と論じるにあたつて、私たちは、以上のことをはつきりと知っておかねばならない。そして、自分自身について、自分が理想と思つたものが、果して真に理想であつたのか、どうか、それを吟味してみなければならぬ。単なる観念は理想ではないのである。真に理想と呼ぶに値する理想ならば、その観念は私たちの胸の中でみずみずしい価値観と結びつき、私たちを突き動かすものとなつていなければならない。そうでなかったとすれば、それは単なる観念か、単なる空想か、たかだか、ひ弱い欲求の表現に過ぎなかったのである。それが無力であつたとしても、³ そのことは、理想が無力だという実例にはならないであろう。

考えてみると、個人は社会の中の個人であつて、社会を離れては存在することができない。その個人が社会との関係で、どうしてもある理想を抱かずにはいられないとすれば、その理想もまた、社会の生み出したものといつていい。いいかえれば、ある人の胸に新しい理想が生まれて来たということ^④は、それだけですでに、社会のイチャグウに、どんなにかすかであろうとも一つの新しいことが起つている、ということなのである。まして、その理想が千人、万人の胸に火を点じてゆくとす

れば、たとえ、まだ、それによって社会全体の変化は生じなくとも、すでに古い現実の中に新しい現実が生まれ来ているのだ、といっている。新しい現実が生まれはじめたからこそ、新しい理想も生まれて来たのである。

——中略——

だから理想とは、単に私たちの未来にかかげられている幻影のようなヒョウシキではない。生きた理想とは、古い現実の中から生まれ出ようとしている新しい現実の、生き生きとした前触れなのである。それは、近づきつつある明日の現実が、地平線の向うから投げかけて来る曙光だといってもよいであろう。

(吉野源三郎『人間を信じる』による)

問1 空欄

I

III

に入るべき語句をそれぞれ次の中から選んで記号で答えな

さい。

ア 遊戯的 イ 巨視的 ウ 悲観的 エ 根源的

問2 傍線部1「個人とは社会あつての個人であつて、本来、社会の中に生まれ、社会の中に育ち、

社会の中で個人となっている」とあるが、「理想」は「個人」や「社会」とどのような関係にあると述べているのか。本文中の語句を用いて四十字以内で答えなさい。

問3 空欄

A

C

に入るべき語句をそれぞれ次の中から選んで記号で答えな

さい。

ア だから イ まして ウ ここで エ しかし

問4 傍線部2「ユートピストたち」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 「ユートピストたち」の考えた「ユートピア」が空想であるとされているのはなぜか。その理由を含んでいる一文を本文中から探し、始めの五字を抜き出して答えなさい。

(2) 「ユートピストたち」の思想が私たちに教えるのはどのようなことか。最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 理想とは現実との関係の中で生まれてくるものであるということ。

イ 理想とは現実からかけはなれたものであるということ。

ウ 現実の中の痛みをあらわすのが理想であるということ。

エ 現実の外で求めに応じて生じるのが理想であるということ。

問5 傍線部3「そのこと」とは何を指しているのか。最も適切なものを次の中から選んで記号で

答えなさい。

ア 自分が理想と考えたものが真の理想ではなかったこと。

イ 自分が理想と思ったものが現実に対して無力であったこと。

ウ 真に理想と呼ぶに値する理想が私たちを突き動かすものとならなかったこと。

エ 理想とは単なる観念や空想やひ弱い欲求の表現に過ぎず、無力であったこと。

問6 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

(二) 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

私は実際には長いこと篠井線の姨捨駅も、その附近も知らなかった。この地方に旅行することはあったが、いつも夜にぶつかることが多く、昼間の場合は気が付かないうちに姨捨駅を通過してて、姨捨山という土地には縁がないままに過ぎていた。

その後、姨捨の棄老伝説が私の頭に蘇^{よみがえ}って来る機縁を作ってくれたのは母であった。

母は何かの拍子^①にふと、

「姨捨山って月の名所だというから、老人はそこへ棄^すてられても、案外悦^{よろこ}んでいたかも知れませんよ。今でも老人が捨てられるというお触れがあるなら、私は悦んで出掛けて行きますよ。一人で住めるだけでもいい。それに棄てられたと思えば、諦^{あきら}めもいいしね」

そう言ったことがある。母は七十歳だった。母の言葉はそれを聞く家人の耳には一様に皮肉に響いた。その座には私の弟妹^②たちも居たが、みなはっとして衝^つかれたような表情を取った。戦後の何かと物の足らぬ時でもあり、家族制度への一般の考え方もヒステリックな変り方を見せている時で、老人夫婦と若い者たちとの間に起る小悶着^{こもんぢやく}は、私の家庭でも決して例外ではなかったが、しかし表だってこれと言って母親に家庭脱出を考えさせるような何の問題もあるわけではなかった。おそらく母は、自分が姨捨の説話の世界では、丁度山に棄てられる七十歳になっていることに気付き、生来の自尊心の強さと負けん気から、その説話にと言うより、それに何か似通って来ている戦後の時代の雰囲気というものに瞬間挑戦する気になったのではないかと思われた。

子供の絵本に描かれてあった老婆のように、母親は髪こそ白いが、艶々した肌と皺^{しわ}一つない若々しい顔を持っていた。私は暫^③く言葉もなく、その母の顔を見守っていた。生来老人嫌いの母であったが、今や彼女自身年齢から言えられつきとした老人であった。私は、自分の老齢を意識し、それに反抗しようとした、そんな母が哀れに思われた。

信濃の姨捨というところが、私に妙に気になり出したのはそれからのことである。

——中略——

勿論、私は観月の場所としての姨捨には殆ど関心らしい関心は持っていなかった。信濃の清澄な空気を透して、千曲川、犀川を包含した、万頃一碧の広野に照り渡る月の眺めはなるほど壯観ではあるうと思つたが、戦時中満洲の荒涼たる原野に照る月を眺めた私には、姨捨の月がそれに勝るものであらうとは思われなかった。

私が姨捨附近を通過する時、例外なく私を襲って来る感慨は、必ずその中に老いた母が坐^{すわ}っていた。ある時私は姨捨駅を通過する時、自分が母を背負い、その附近をさまよい歩いている情景を眼に浮べた。

勿論時代は太古である。丘陵の中腹から裾に点在している現在の人家の茂りは見られず、荒涼たる原野が広がっている。しかも夜で月光が絵本『おぼすて山』の挿絵のように辺り一面に青く降り、私と母の影だけが黒い。

「一体、わたしをどこへ棄てようというの?」

と、母は言う。七十を過ぎて体全体が小さくなり、その体重は心細いほど軽いが、私はともかく一人の人間を背負って方々歩き廻^{まわ}った果てなのでひどく疲れている。一足歩く度に足許^{あしもと}がふらつく。

「ここにしますか。この辺に小さい小屋を建てたら——？」

私が言うと、

「厭、こんな場所！」

母の声は若い。体は弱っているが、気持は確りして、生れ付きの妥協のなさ、自分が棄てられるこのような場合にも、いささかの衰えを見せていない。

「崖の傍では、雨の時山崩れでもしたら危ないじゃありませんか！ もっと気の利いたところはないものかしら」

「それがないんです。大体、お母さんの望みは贅沢ですよ。やはり、先刻見た寺の離れを借りることにしたらどうですか」

「おお、いや、厭！」

母は背中で、わが儘な子供のように手足をばたつかせる。

「あそこは夏には蚊が多いと思うの。それに建物も古いし、部屋も暗くて陰気じゃありませんか。」

I

私は途方に暮れてしまう。

「それなら、やはりいつそのこと家へ戻りましょう。こんなところに住むより、家へ帰って、みんなと一緒に賑やかに暮した方がどんなにいいか判らない」

「また、そんなことを言い出して！ 折角家を出て来た以上、わたしは、家へだけはどんなことがあっても帰りません。」

II

。家の者も厭、村の人も厭、もうわたしは老い先短い

「わが儘ですよ、お母さんは！」

「わが儘ですとも。わが儘は生れ付きだから仕方ありませんよ。それにしても、わたしの顔さえ見れば、貴方はわが儘だ、わが儘だと言う。」

III

「困ったな！」

「いくら困ったって、わたしは家へなんか帰らないから。早く棄てておくれ」

「棄てたくても、適当な場所が見当らないじゃないですか」

「見当らないのは探し方が悪いからです。一人の母のために、棄てる場所ぐらい探してくれたって罰は当りますまい」

「先刻から足を棒にして探しているじゃありませんか。私はふらふらしていることは知っているでしょう。一体、どのくらい歩いたと思います。当ってみた家だけでも十軒はありますよ」

「でも、わたしにはどこも気に入らないんですもの。大体、住めそうな家が一軒でもありましたか」

「だから家を借りるのは諦めて、気に入る場所を探し、そこへ私が小屋を建ててあげようと言っているでしょう。それを、どこへ行っても文句ばかり言って」

「文句だって言いますよ、老人ですもの。——ああ、ほんとに何処か一人きりで静かに住める場所はないものかしら。もっと親身になって探しておくれよ。——ああ、腰が痛いわ。もっと軽くふわりと背負っておくれ。おお、寒くなった。月の光がちくちくと肌を刺すような気がする」

「暴れないで静かにして下さいよ。私も疲れているんです。お母さんは背負われているからいいが、私の方は背負っているんですからね。お願いです。やはり、家へ帰ることにして下さい。み

んなもどんなに安心するでしょう」

「厭！」

またしてもぴしやりと母は言う。

「厭でも知りません。こんなところを一晚中うろついていられますか。本当に私は帰りますよ」すると、母は急に打って変った弱々しい声を張り上げる。

「堪忍しておくれ。それだけは堪忍しておくれ。どうか家へだけは連れ戻さないでおくれ。もうなんにも言いません。どんなところでも結構です。棄てておくれ。わが儘は言いません。あそこに小屋が見える。あそこでもいい。あそこへ棄てておくれ」

「あの小屋は先刻見た時隙間風が冷たいとおっしゃったじゃありませんか。それに雨漏りもする！」

IV

「もう辛抱します。一軒家だから、その点は静かにのんびりと住めるでしょう」

「だが、あそこはやはりひどいですよ。子供として母親をあそこには棄てられません」

「ひどくても構わない。さ、早く、あそこへ棄てて行っておくれ」

そう母は言う。3 たぐ こんどはそこに佇んでいる私の体に、月光が刺すように痛く沁み込んで来る。

——私の眼に浮かんで来たのは、こうした私と母との一幕である。私と私の背に負われている母との会話は自然にすらすらと私の脳裡に流れ出て来たものである。母はわが儘であるが、その表情には真剣なものがある。棄てておくれ、棄てておくれと言っている母のせがみ方には、ある実感が滲み出ている。

私はわれに返ると、空想の中の母に、いかにも自然に母らしい性格が滲み出ていることが可笑しかった。姨捨を舞台とした私の空想的一幕物は、例の棄老説話の持つ主題とはかなり遠く隔たっていた。私の場合は母自らが棄てられることを望んでいるからである。棄てられたいと言いつて諾かないのである。私はそんな背の母を持て余して、姨捨の丘陵地帯をさまよい歩いているのであった。しかし、その可笑しさとは別に、自分の心のどこかに氷の小さい固塊のようなものが置かれてあるのを私は感じた。可笑しさが消えると、それに代って、冷んやりした思いが次第に心の全面に拡がって来そうであった。

私は自分が棄てられたいとせがんでいる母を想像したことが厭であった。^⑤ 寧ろ自分が母を棄てようとしている場面を想像する方が、まだしも気はらくであるかも知れなかった。

それにしても、私はどうしてそんな母を想像したのであろうか。私は長い間そのことを考えていた。そして私は私の背の上に、母に代って自分を置いてみた。私が老人になったら、今空想した母のように或いは自分になるかも知れないと思った。

(井上靖「姨捨」による)

問1 傍線部1「自分の老齢を意識し、それに反抗しようとした」とあるが、「母」はどのような気持ちからそうしたと「私」は考えているのか。本文中の語句を用いて八十字以内で説明しなさい。

問 2

傍線部 2 「ある時私は姨捨駅を通過する時、自分が母を背負い、その附近をさまよい歩いている情景を眼に浮べた」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) この「情景」に対して「私」が抱いた心情の説明として最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 丘陵の中腹から裾に点在している人家の茂りが見られない太古の時代に、荒涼たる原野が広がっている中、気弱な表情で仕方なく棄てておくれと言ってくる空想の中の「母」の姿に対して、可笑しいと感じた。

イ 空想の中の「母」は「母」らしい性格が滲んでいて、例の棄老伝説とは違って自ら棄てられたいと望んでおり、「私」が背負っている「母」を持って余して丘陵地帯をさまよい歩いていることに対して、可笑しいと感じた。

ウ 生来の自尊心や負けん気を持っている現実の「母」と同じように、空想の中の「母」にも生れ付きの妥協のなさやわが儘がはつきりと滲み出ていることに対して、自分の親ながらも哀れだと感じた。

エ 空想の中の「母」は、体が弱っているながらもその声は若く気持が確りしていたが、七十を過ぎて体全体が小さくなり、体重が心細いほど軽くなっていることに対して、自分の親ながらも哀れだと感じた。

(2) この「情景」はどのように想像されたものなのか。それを述べている一文を本文中から探し、始めの五字を抜き出して答えなさい。

問 3

空欄

I

IV

に入るべき言葉をそれぞれ次の中から選んで記号で答えなさい。

ア またみんなと一緒になんでもまっぴらですよ

イ どうせ気には入らないが、でも、仕方がない

ウ 他人のことだと思って、不親切ね、貴方は

エ 棄てられるというのに何かが儘です

問 4

傍線部 3 「こんどはそこに佇んでいる私の体に、月光が刺すように痛く沁み込んで来る」とあるが、どのような様子を言い表しているのか。その説明として最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 万頃一碧の広野に照り渡る月の眺めの壮観さが、「私」の心に自然と深く印象づけられる様子。

イ 満洲の荒涼たる原野の月と同じような姿の姨捨山の月が、「私」の体を青白く照らし出す様子。

ウ 絵本の挿絵のように辺り一面に青く降る月の光で、「私」と「母」の心に黒い影が差し込んでいる様子。

エ 信濃の清澄な空気を透して照り渡る月の光によって、「私」の心と体が冷え冷えと感じられる様子。

問 5 次の中から井上靖の作品でないものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア 『沈黙』 イ 『あすなろ物語』 ウ 『天平の薨^{いづか}』 エ 『しろばんば』

問 6 傍線部①～⑤の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

〔以下 余 白〕

国語解答用紙

<2022 R 04160062>

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

<2022 R 04160062>

受 験 番 号	万	千	百	十	一
氏 名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

$$(=)$$
 $(-)$

問 6	問 4	問 3	問 2	問 1																																																																											
①	□	I	(1) □	<table border="1" style="width: 100%; height: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </table>																																																																											
②		II																																																																													
	問 5 □	III	(2) (始め) □																																																																												
③		IV	□																																																																												
<			□																																																																												
④			□																																																																												
			□																																																																												
⑤			□																																																																												
ろ			□																																																																												
			□																																																																												
			□																																																																												
			□																																																																												
			□																																																																												
			□																																																																												

(80字)

問6 採点欄

問3・4・5採点欄

問2 採点欄

問1 採点欄	正解	不正解
	+	-

(80字)

[illegible]

Figure 1: A schematic diagram of a 1D lattice. The top part shows a chain of sites with a central site labeled '0' and sites to its left and right labeled '1', '2', '3', etc. A vertical double-headed arrow labeled 'a' indicates the lattice spacing. A horizontal double-headed arrow labeled 'L' indicates the total length of the chain. The bottom part shows a similar chain, but with a different labeling scheme for the sites, possibly representing a different boundary condition or a different set of sites.

[illegible]

問3 採点欄

+	-

+	-
問2 採点欄	

[illegible]

(40字)

$$\left(\begin{array}{c} \text{---} \\ \text{---} \end{array} \right)$$
 $(-)$ [illegible]

問3・4・5採点欄

+	-

問2 採点欄

問1採点欄	+	—

+	1	1
	2	2
	3	3
	4	4
	5	5
	6	6
	7	7
	8	8
	9	9
	10	10
	11	11
	12	12
	13	13
	14	14
	15	15
	16	16
	17	17
	18	18
	19	19
	20	20
	21	21
	22	22
	23	23
	24	24
	25	25
	26	26
	27	27
	28	28
	29	29
	30	30
	31	31
	32	32
	33	33
	34	34
	35	35
	36	36
	37	37
	38	38
	39	39
	40	40
	41	41
	42	42
	43	43
	44	44
	45	45
	46	46
	47	47
	48	48
	49	49
	50	50
	51	51
	52	52
	53	53
	54	54
	55	55
	56	56
	57	57
	58	58
	59	59
	60	60
	61	61
	62	62
	63	63
	64	64
	65	65
	66	66
	67	67
	68	68
	69	69
	70	70
	71	71
	72	72
	73	73
	74	74
	75	75
	76	76
	77	77
	78	78
	79	79
	80	80
	81	81
	82	82
	83	83
	84	84
	85	85
	86	86
	87	87
	88	88
	89	89
	90	90
	91	91
	92	92
	93	93
	94	94
	95	95
	96	96
	97	97
	98	98
	99	99
	100	100

	1	
	2	
	3	
	4	
	5	
	6	
	7	
	8	
	9	
	10	

+	問3 採点欄

+	-

問1 採点欄